



行われる。それは、目の不自由な芸人が一人で楽器を演奏しながら歌うことになっている。特に一人で七種類の楽器を演奏することは、鋭気があり、非常に際立っている⁽¹⁾。

残念なことに、このような独特な風格を帯びる伝統的な地方曲芸を演じる芸人の数は今では三十人以下になってしまった。そのうえ弟子を募集しても誰も学びに来ないということが、「裏垣鼓書」の伝承における最大の問題である。また、観客層をみてもやはり年寄りの方が多い。

この状況は中国だけでなく、日本の伝統曲芸調査にも同じことが言える。筆者は日本滞在中、横浜三溪園の琵琶演奏会に行った。また、東京の国立能楽堂、浅草演芸ホールなどの伝統曲芸を上演する場所で実地調査を行った。気付いたことはまず観客の人数が少ないこと。また、観客層は年配者が多いことである。それらのことから伝統的な曲芸は若い人たちにそれほど受け入れられなくなったことが分かった。

中国であれ日本であれ、伝統的な曲芸における発展の見込みはいずれも楽観視できない状況になっている。伝承者の高齢化や、後継者不足の問題はとても深刻で、さらには曲芸の大衆的受容も希薄になってしまった。これら



写真3 浅草演芸ホールで上演した日本の伝統的な曲芸
(東京の浅草演芸ホール・2015/10/04撮影)

の問題を解決しない限り、かつて我々の生活に深い影響を与えた貴重な無形文化財はみるみるうちに消えてしまう運命にあるだろう。問題の解決は決して容易ではないが、高齢化、都市化の問題を抱えた今、「一刻を争う事態」と認識し、無形文化財の保護に早急に取り組むことが必要であると、筆者は考えている。

[注]

(1) 王 徳昌『裏垣鼓書精品匯集』、政協襄垣県委員文史委、襄垣県文化服務中心編印、序。

日本の文化、現代美術、マンガ探究



Simonia Fukue Nakagawa
(ブラジル サンパウロ大学 日本文化研究所)

この調査は、非文字資料研究センターの訪問研究員制度により、日本の美的価値観といえる「カワイイ」と「バサラ」の関係を、日本の現代美術家の奈良美智と村上隆の二人の作品から導き出したものである。



写真1 村上隆 個展「円相」、Kaikai Kiki Galleryにて
撮影：シモニア・フクエ

私は以前、2004年から2005年の間日本に住んでいたことがあったが、その頃と比べると、観光地や公共交通機関の案内にローマ字や英語の説明が加えられるなど大きく

変化していることに気付いた。そのことは単に日本が変わったというだけでなく、グローバル化によって、インターネットでの情報アクセスが容易になり、より多くの世界の人々が日本のポップカルチャー、特にアニメやマンガの虜になり始めたためと説明することができる。まさしくこれは、私が研究者として日本に戻ってきた理由の



写真2

Blum & Poe Tokyoギャラリーでは奈良美智の作品を撮影することはできなかった。その後研究の合間に奈良美智が手掛けたカフェに立ち寄ったが、私の知っている作品は撤去されたり作者の元に戻されたりしてしまっていた。

一つでもある。

21日間で行う研究の内容は前もって明確に決めていた。「カワイイ」と「バサラ」について、現代美術家の村上隆と奈良美智について、マンガについて (将

来の調査のため)、の三つである。

滞在一日目、私は大学に行き非文字資料研究センターのスタッフの方々への挨拶を済ませ、宿泊先のチェックインを行った。その後私は、指導教授でありコミックの歴史に詳しいステファン・ブッヘンベルグ教授に会い、私が感じている疑問に答えていただくなど多くのことを説明してもらい、日本のコミックだけでなく、文化についても調査するとよいと指導してもらった。

その日はそのまま非文字資料研究センターに残り、「カワイイ」と「バサラ」の研究を行った。その作業はこれら二つの美的価値観を、通りやお店、ショーケース、そして日本全体の社会のなかで見つける準備段階として、より理解を深めるために重要なものであった。

「かわいい」の元の形は「かほはゆし」であり、それが「かわゆし」に短縮され、口語で「かわゆい」となり、第二次世界大戦後頃までに最終的に「かわいい」になったことが、これらの研究のなかで分かった。その意味は「哀れみの感情」「深い同情」「もろさ」などを意味するが、主には「かわいい人」「優美な」「壊れやすい」といった意味で使われる。しかし別の種類の「かわいい」もあり、それは「キモかわいい」というもので、「気持ちが悪いもの、不快に思うもの」と「かわいいもの、繊細なもの」が合わさったものである。



写真3 「カワイイ」 in 原宿
撮影：シモニア・フクエ

原宿には二回行ったが、残念ながらロリータファッションの少女たちを見つけインタビューすることはできなかった。

ロリータファッションに見られるこの美的価値観は村上隆や奈良美智の作品に表現されており、時には可愛げのあるキャラクター、時にはグロテスクなモンスターたち、そして反抗的な子どもたちなどに表現されている。

バサラについての美的価値観に関してそれまでは、きわめて少ない理論的な知識しか持ち合わせていなかった。それは私の研究成果の目標が十分に達成されていなかったからである。この研究に対して最も完成された作品を出したのが芸術家の天明屋尚である。彼は2010年に「BASARA展」を開催した。私はこの研究の知識を増やすためにミヅマアートギャラリーを訪れたが、そこで見つけた情報はすでに私が得ているものであった。

奈良美智と村上隆の二人の関連性を調べるにあたり、Blum & Poe Tokyo ギャラリーのディレクターの久保玲奈さんと横浜美術館の学芸員の内山淳子さんにはこれら二人の美術様式について非常に丁寧に説明していただいた。奈良美智のアートは内観的な表現で、村上隆は商業的な要素を含んでいるということだった。

私は今後の研究のため、チューターの高森美憂さんに同行してもらい、国際的なマンガイベントに足を運んだ。同人誌というものは、ヨーロッパの影響と、日本の伝統的なマンガの生き生きとした構図によって作られたのではないかと私はそこで気付いた。これは明治大学の「米沢嘉博記念図書館 まんがとサブカルチャー」の教授、斎藤宣彦氏さんとマンガ研究者の野田謙介さんと親切な通訳と説明をしてくれた佐々木みつ希さんによって、ある程度立証された。

今回の私の研究結果として、「バサラ」と「かわいい」という美的価値観は、奈良美智と村上隆の作品だけでなく、日本社会と文化全体に影響していることが分かった。



写真4 海外マンガフェスタで購入した同人誌
撮影：シモニア・フクエ

民俗と生活 —日本訪問時の見聞と感想—

鄧 苗
(北京師範大学民俗学与文化人類学研究所)



日本での訪問期間中、日本の民俗文化を調査し、初

歩的な研究を試みた。また、日常生活を通して日本の